

# 雅楽だより

## 《目次》

●カナ譜に浮かんだ古代の旋律	芝祐靖	1
●ハワイ大学で雅楽を教えて53年 社本正登司氏		1
●漢字遊びの楽しみ	宮田まゆみ	8
●席田小学校の生徒達の声で 歌われる「席田」	豊英秋	10

●韓国で日本の雅楽行事を開催		11
●宗教と雅楽 パリの川風の中で	上野慶夫	12
●斎王と観る月「いつきのみや観月会」	千種清美	13
●現代語訳『楽家録』(7)	遠藤徹	14
●情報欄		14

第44号  
発行

2016(平成28)年1月  
雅楽協議会

## カナ譜に浮かんだ

## 古代の旋律

雅楽演奏家 芝祐靖

### 《プロローグ》

古い話で恐縮です。昭和50(1975)年の春頃、国立劇場のプロデューサー木戸敏郎氏より、龍笛古譜のコピーを手渡され、「この中の『盤渉参軍』を舞台にあげたいので、皆が合奏の出来る楽譜に直してほしい」と言われました。コピー楽譜はB4二つ折り約六十ページが二冊あり、表紙にはそれぞれ「博雅長竹譜」「乾・坤」とありました。

恐る恐る「乾」のページをめくりすと目録に双調曲、黄鐘調曲、盤渉調曲、林邑物、伎楽として数多くの楽曲名が書かれています。ほとんど知らない曲ばかりでした。しかしよく見ると双調の項に『柳花苑』『春庭楽』。黄鐘調に『桃李花』『喜春楽』『海青楽』。盤渉調に『蘇合香』『蘇莫者』『輪台』『青海波』。『竹林楽』『白柱』。林邑物に『陪臚』『拔頭』と私たちが平生演奏している楽曲名がありましたので、何か急に親しみが湧いてきました。ところが奥付に「康保三年十月十四日 正四位下行左近中将兼近江権守 源朝臣博雅」とありましたので、急に怖じけ付いて「私はまだ演奏経験も浅く、古楽譜の復曲は全く不可能です」とお断りしましたが、木戸氏は「こ

の『盤渉参軍』は、雅楽の原点ともいえる唐代音楽の響きが籠っているはず。一帖でも二帖でもよいから何とか取り組んでみてくれ」と執拗に迫られましたので、一帖だけのつもりで引き受けてしまいました。

## ハワイ大学で 雅楽を教えて53年

社本正登司氏

ハワイ大学で雅楽を教え始めて今年で53年目、またドイツ・ケルン大学雅楽部の生みの親でもあり、2009年には旭日双光章を叙勲された社本正登司氏をハワイに訪ね雅楽についてお話を伺いました。

### ハワイへ文化伝道

社本氏は1959年1月、文化伝道の為に船で10日間をかけてハワイへ渡り、9歳の頃より習い始めた雅楽をハワイの子どもたちへ教え始めたといっています。

社本氏は「ハワイで子ども達へ雅楽を教え始めると、「雅楽は、エキゾチック」という(4ページ下段へ続く)



それから『盤渉参軍』の指穴譜とニラメッコが始まりましたが、作業に入って間もなく、カナ譜付けに行き詰まっていると父親(祐泰)から「分からないことはやるものじゃない!」と怒鳴られ、また恩師・東儀和太郎先生から(2ページ上段へ続く)



ハワイ大学雅楽クラスで雅楽を指導する社本氏(右)  
2015年11月18日 ハワイ大学音楽教室にて

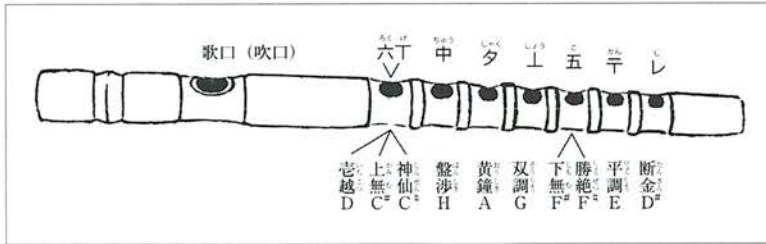
も「マンモスや恐竜の骨を繋ぎ合わせることは出来ても、生命の火は灯せないぞ」と忠告され、心身ともに憔悴しながらカナ譜化作業が続きました。

〔カナ譜化の手段〕

今日の雅楽演奏家は明治撰定譜を用いて修練しておりますので、管絃合奏の笙・箏・篳篥・琵琶・箏の楽譜は明治撰定譜に倣った楽譜を作る必要があります。特に箏楽と龍笛譜にはカナ譜と指穴譜が併記してあります。

（カナ譜は雅楽の旋律を歌って記憶するためのものです）。

長竹譜の音移動は、龍笛の七つの指穴名（六、丁中、タ、上、五、下、レ）のみです。で、まず指の動きをカナ譜に起こす作業から始めました。



〔龍笛指穴名図〕

〔参考譜①〕

長竹譜  
カナ付け  
夕 五 下 六 下 六 丁 中 引  
夕 ト ラ ロ ラ ロ リ ラ 引

〔参考譜②〕

長竹譜  
カナ付け  
夕 五 下 六 下 六 丁 中 引  
夕 ト ラ ア ロ ホ ト ラ ロ リ ヒ ラ ア 引

か、チャチヨヒヤヒヨリヤリヨなどが音高や音型によって使い分けられています。箏楽のカナ譜では、エテヘ（フエ）レの文字も使います。

『盤渉参軍』序の指穴譜にカナを当ててみました。（参考譜①参照）

一応、カナは付きましたが、このカナ譜からは龍笛らしい旋律は浮かばず、唱歌も出来ません。そこで長竹譜に記載されている盤渉調の『輪台』『青海波』『蘇莫者』などの楽譜を見ながら、習い覚えた明治撰定譜の龍笛唱歌を歌って比較してみました。すると長竹譜には、装飾音などの細かな動きは記していないものの、旋律の骨子はほとんど同じであることが分かり、一千年間、ほぼ同一の旋律が

伝承されていることに驚かされました。

しかし、龍笛演奏者にとつて、とても大切な装飾音が、何故か記されていません。もしかすると装飾的な細かな指使いは、他の楽所（南都や天王寺）に知られないよう秘事として楽譜には記さなかつたのではとも考えられます。

前記参考譜①の長竹譜に、明治撰定譜に準じた龍笛唱歌カナ譜を付けてみました。（参考譜②参照）

このようにカナを記しますと歌えますし龍笛を吹奏できます。ある程度約束ごとを解決すれば、古楽譜の復曲も可能かと勇気付けられました。

『盤渉参軍』は序十三帖、破十帖があり、

カナ譜付けにはかなりの時間が掛かると思っておりましたが、様子が分かりますと、意外と順調に作業は進みました。

龍笛のカナ譜化が一曲仕上がりますと、カナ譜の旋律を忘れないうちに箏楽のカナ譜を作ります。そして笙の合竹譜を付してから、次に琵琶譜と箏譜を書き入れて、一応雅楽総譜が出来上がりました。

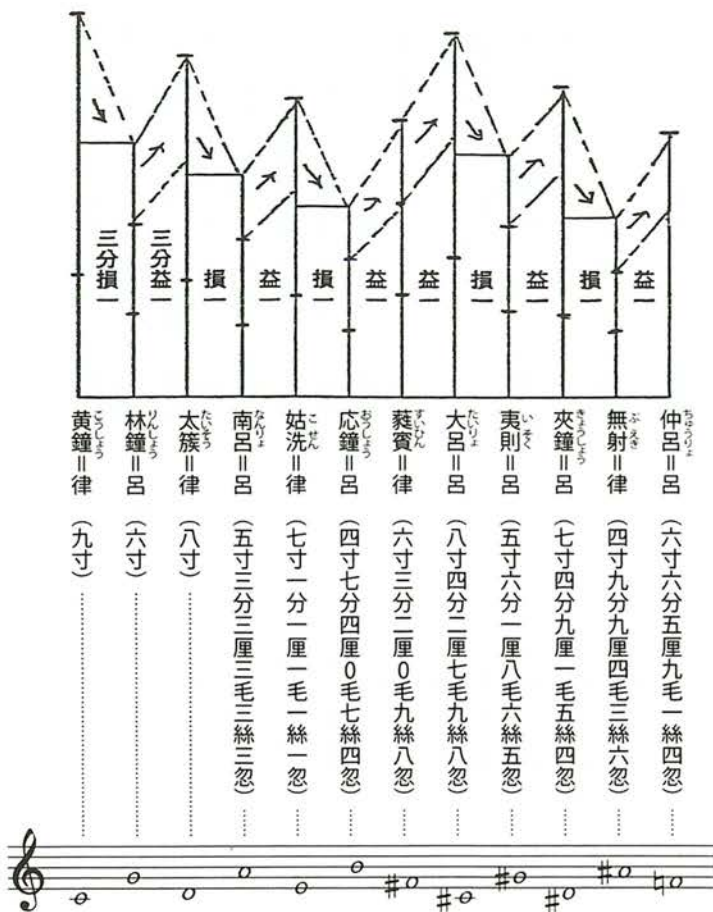
〔盤渉調について〕

『盤渉参軍』の治革については遠藤徹氏がお書きになっておられるので、ここではカナ譜付けなどに必要な雅楽の「調」について少し触れてみたいと思います。現行の明治撰定譜の楽曲は、六つの調子（老越調、平調、双調、黄鐘調、盤渉調、太食調）のいずれかに属しています。例外もあって、舞楽『蘭陵王』や『降魔急』の折に「沙陀調音取」を演奏したり、黄鐘調の「平蛮楽」や「鳥急」では琵琶と箏が「水調」という調絃をして演奏します。これは「枝調子」といい古制の名残です。

古代中国には紀元前二千年頃、伶倫という音楽家が「三分損益法」という計算で十二音を定め、その後には管仲という学者が、十二音それぞれに宮・商・角・変徴・徴・羽・変宮それぞれの音に七音々階を算出し、八十四調の音階を作り上げました。（三分損益立均図参照）

八十四の音階はいかにも多すぎるといって、玄宗皇帝は音と調の関係を精査して、主要な四音、黄鐘（下）、太簇（レ）、仲呂（ファ）、

【三分損益立均図】



考譜③参照

〈夢の変容〉

林鐘(ソ)に七音々階を当てて二十八の調を作り、天宝十三載(七五四年)七月に変更を知らせる石刊を建てたといひます。音階は、八十四から二十八に縮小しましたが、その調名には宴楽(宮廷音楽)と胡楽(西域楽)に用いられていた調名が入り交じっていて、難解なものとなったようです。

日本の雅楽の六調子名は、この天宝十三載以後の二十八調の中から選ばれました。盤渉調は中国の「太簇均羽調」と同じ音階です。(参

八世紀初頭日本では太政官治部省に雅楽寮を開設して、巷の多くの若者たちが唐楽を学び始め、中国から楽器や装束を導入し、指導者も招来しました。唐楽には多くの楽器が使われますが、音律や音響そして拍節が整然として、それは見事なアンサンブルでした。奈良・東大寺大仏開眼供養の折には、アジア諸

古代中国の太簇均音階

レ	ミ	ファ#	ソ#	ラ	シ	ド#	レ	ミ	ファ#	ソ#	ラ
太簇均階名	宮	商	角	変徵	徵	シ羽	レ	ミ	ファ#	ソ#	ラ
盤渉調は太簇均羽調	(日本の律旋階名)										
	宮	商	嬰商	律角	徵	羽	嬰羽	宮			

【参考譜③】

国の歌舞が演奏されましたが、大唐の音楽や舞は群を抜いて輝かしく、列席の諸公や僧侶そして参詣者から絶賛を浴びたといひます。雅楽寮で学んでいた邦人もきつと演奏に参加していたことでしょう。

「唐の音楽は絢爛であるが、四季の情緒を愛でる日本人に合わない」として唐楽の和風化を図りました。

和風化の中心人物は長竹譜の撰者、源博雅のような気がします。博雅の音楽エピソードは枚挙にいとまがありませんが、特に筆篋の名手であったようです。博雅は当時の筆篋奏者を集め「御遊の唐楽合奏時に、筆篋は日本

一方、雅楽寮での音楽教習や合奏に満足できない堂上公卿の音楽家は遣唐船に乗って中国に渡り、長安の大楽署(音楽教習所)で唐楽を学びました。それぞれ数年の研修を経て帰国していますが

音階で奏でることを提唱しました。集まった筆篋奏者は仰天しました。博雅の三位の立案を拒否すること、わがわが日本音階での吹奏を練習しました。(参考譜④参照)

盤渉調の音階	宮	商	嬰商	律角	徵	羽	嬰羽	宮
※笙・琵琶・箏の音階	シ	ド#	レ	ミ	ファ#	ソ#	ラ	(シ)
日本の歌謡五声音階	宮	商	嬰商	律角	徵	羽	嬰羽	宮
※筆篋の音階	シ	ド#	レ	ミ	ファ#	ソ#	ラ	(シ)
	上行	下行	変商	律角	徵	嬰羽	変羽	宮

【参考譜④】

クレームがつけましたが、音楽として厚みと深みを増したことが次第に認められ、合奏を重ねるうちに理解者も増え、ここに「日本の雅楽」の響きが完成しました。平安中後期の樂制改革は、世界でも稀な、異なる二つの音階を持つ音楽を作り上げました。この成果によって、雅楽はその後一千年の伝承を可能にしたと申せましょう。

演奏の速度は？

話がそれました。本題に戻しましょう。

『盤渉参軍』の総譜が出来上がり、いよいよ練習に入る段階でまた一つ問題が持ち上がりました。それは『盤渉参軍』序十三帖と破十帖の楽譜には演奏速度に関する指示が全くありません。それぞれのようなテンポで演奏したものか悩みました。明治撰定譜の各楽曲には「延八拍子」から「早四拍子」まで、八種類の速度の指定があります。「延八拍子」とは、かなりゆったりとした旋律が八小節単位で進行するという指示です。「早四拍子」は軽やかな旋律が四小節単位で進行するという指示です。

『盤渉参軍』の序一帖の譜には、百(太鼓)の書き込みがないので打楽器を奏でない「遊声」という奏法をします。序二帖は百が記してありますので、通常の序(フリーリズム)の奏法で、鞆鼓は塩短声(序の打法)を打ち各節の終りには太鼓と鉦鼓が打たれます。三帖以下十三帖までの速度は、カナ譜に浮かび上がった旋律によって、速度を定めました(楽曲構成表参照)。

『参軍頌』について

『盤渉参軍』の楽譜を仕上げて合奏練習に入り、長時間の練習が終わった後、何か物足りなさを感じました。それは「急」に当たる曲がないことでした。

雅楽曲の基本的な形態は、序・破・急が揃っていることで、大曲の『蘇莫者』『春鶯囀』は見事な曲体を示しております。『盤渉参軍』

は序十三帖、破十帖と他に類を見ない長大な構成ですが、急がないのが残念に思い、大変尊大と思いましたが、『盤渉参軍』を讀える気持ちで昭和五十三年に『参軍頌』を作曲し、急を補いました。

エピソード

昭和五十年から足掛け三年掛かりで序十三帖の総譜を書き上げ、宮内庁楽部の方々に試奏してもらったところ「こんな指遣いはない」「この譜は歌えない」など、様々なクレームがついて、その都度、作り直し、書き直しをしました。しかしその忠告が後の復曲作業の

【楽曲構成表】

盤渉参軍「序」	一帖 序奏	打ち物不奏	「破」	一帖 延八拍子	拍子十 大掲声
二帖 序奏	拍子十 塩短声		二帖 延四拍子	拍子十 泉郎声	
三帖 延八拍子	拍子十 大掲声		三帖 早八拍子	拍子十 沙音声	
四帖 延四拍子	拍子十 泉郎声		四帖 早四拍子	拍子十 沙音声	
五帖 延四拍子	拍子十 泉郎声		五帖 早只八拍子	拍子十 古楽掻	
六帖 早八拍子	拍子十 沙音声		六帖 延四拍子	拍子十 泉郎声	
七帖 早六拍子	拍子十 織錦声		七帖 早四拍子	拍子十 古楽掻	
八帖 早八拍子	拍子十 沙音声		八帖 延四拍子	拍子十 泉郎声	
九帖 早八拍子	拍子十 沙音声		九帖 早四拍子	拍子十 古楽掻	
十帖 延四拍子	拍子十 泉郎声		十帖 早八拍子	拍子十 沙音声	
十一帖 延八拍子	拍子十 大掲声				
十二帖 早八拍子	拍子十 沙音声		参軍頌 早八拍子	拍子十 沙音声	
十三帖 早八拍子	拍子十 古楽掻				

糧となり、『鳥歌萬歳楽』『玉樹後庭花』『清上楽』『安城楽』『陵王荒序』『皇帝破陣楽』『散吟打毬楽』『団乱旋』などの復曲に大いに参考になり、また『露台乱舞』『巾褌輪説』『五行長秋楽』『舞風神三十五』の作曲に大いに役立ちました。

忠告や指導をしてくださった楽師の方々にあらためて感謝申し上げます。

また今回、超大曲・『盤渉参軍』の全曲演奏をお引き受けくださいました十二音会の皆様に衷心より御礼申し上げます。  
(国立劇場第77回雅楽公演 2015年11月7日プログラムより)

(1ページ左下より)

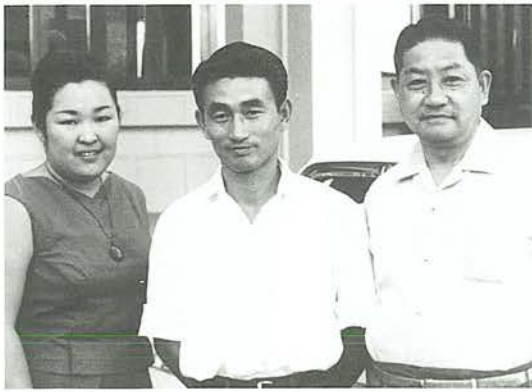
ことも手伝ってハワイで話題になり、2年ほどして、ハワイ大学のバーバラ・スミス教授から「ハワイ大学東洋音楽科で雅楽の指導をしてくれないか」という話が持ち込まれました。この東洋音楽科には、中国、インド、朝鮮、ポリネシア、琉球、日本などの音楽を研究している学生たちがおりました。私は悩みましたが1962年、苦勞を覚悟でハワイ大学で雅楽を教えることにしました。1960年代といえは、まだテープレコーダーやビデオ機器などは贅沢なものでした。唱歌をローマ字にし、四拍子一コマの譜面にさまざまな記号を考案して楽譜を作ったりして教えました。

雅楽クラスの生徒は欧米人が多く、音楽科を専攻しているだけあって音感はずばらしい。五線譜に収まらない音域にも敏感な耳を持っていて、雅楽の音階や間を教えるのにも「どうしてだ」とよく質問されました。

そしてさらに素晴らしいことは、我々の野外演習でした。土曜や日曜に楽器を車に積んで山や草原や海辺に出かけて練習しました。ピクニック、バーベキューを兼ねて自然のなかで東洋音楽を演習することに彼ら学生は非常に感動したようでした。」

譜面も楽器も無い所から

社本氏がハワイ大学で雅楽を教えた翌年の1963年、日本雅楽会会長の押田良久氏が著作権協会の仕事でハワイを訪れた時、偶然にもハワイでの案内を頼まれたのが社本



1963年 社本氏が押田氏との初めての出会い。  
社本正登司氏(中央)、押田良久氏(右)、社本氏夫人(左)

氏であったといえます。押田氏は雅楽の普及ということもあり雅楽のレコードも持参しており、ハワイでの雅楽鑑賞会の準備を社本氏にお願したところ、社本氏は喜んで引き受けハワイ大学で開催されました。

社本氏は当時の事を「私が押田氏と出会ってから、雅楽で分らないことや資料が欲しい時は、決まって日本雅楽会会長押田良久氏に問合せました。授業が進むにつれ、雅楽のフルオーケストラを組織しようと思いました。が、琵琶がない。実をいうと、そのころ私は琵琶を演奏することがなかったのです。そこで、私は押田さんに琵琶の楽譜や演奏テープを頼みました。すると押田さんは、宮内庁の楽師の方に演奏していただいてテープに録音し送ってくださいました。楽器なども協力いただいて整い始め、そして私をはげましてくれました。」と当時の苦勞を語ります。

### ハワイ雅楽研究会の結成へ

社本さんは続けて「ハワイ大学で雅楽に触れ、博士論文を書き終えるのに6年ぐらいかかりますが、ハワイ大学を卒業しても雅楽の演奏や研究を続けられるようにと1968年1月ハワイ雅楽研究会を結成しました。さらに日本雅楽会ハワイ支部も誕生させました。

こんな話もあります。日系三世で日本語が話せない女子学生が私のクラスにやってきて「自分は両親共に日本人で100%日本の血が流れているけど、日本文化を知らないのは恥ずかしい事だ」と話して、私の所で雅楽を始めました。このような日系人も雅楽を学ぶようになっていきました。ハワイ雅楽研究会は今も毎年多くの演奏会などを開催しています。」

### 宮内庁楽部などで雅楽の研修

1971年7月21日〜8月27日

ハワイ大学で教え始めてから10年目、社本氏は、ハワイ大学の学生9名を引き連れて、雅楽の研修のため1971年7月21日から8月27日までの38日間、宮内庁楽部の藺廣育氏、東儀博氏、東儀和太郎氏、芝祐靖氏、上明彦氏、安倍季昌氏などの先生方より管楽器、絃楽器、打楽器、舞楽の特訓を受けるために来日し、8月中旬からは、関西に移動し関西の雅楽団体との交流も行いました。

そして帰国する前日、8月27日には東京の都市センターホールで「日米交歓公演会」を開催しました。

その当時のことを社本氏は「今まで外国人が雅楽の勉強のために日本を訪れたのは十指



1971年7月 ハワイより雅楽の研修で日本へ、宮内庁楽部の前で前列は楽部の先生方、2列目中央 社本氏

に余る。しかし、団体に雅楽の勉強に日本を訪れ、外国人のみで雅楽を演奏して帰ったのは千何百年の雅楽史始まって以来のこと。それ故、多くの新聞やラジオ、テレビそして週刊誌に取り上げられ、方々で思わぬ歓迎をいただいた。東儀博先生からは「はじめは、どうせ遊び半分なのだろうとタカをくくっていたのが、どうしてどうしてみんなすごいがんばり屋さんで、こちらが慌てちゃったよ」と。また東儀和太郎先生からは「みんなよくできた。日本へきたかいたがりました。多くの著名の方々にかけて下さった「すばらしい日米親善

の役をはたしましたネ」の言葉がジーンとしてみても、今でも感激が生のまま甦ってきます」と語る。

そしてさらに「東儀博先生の言われた次の言葉も忘れることが出来ません。東儀博先生は、「インドでは子供は学校でインドの音楽や舞を習う。そして外国の音楽や舞を習いたい子はまちの教習所で月謝を払って習う。日本はどうだい。学校では西洋のものを習い、日本古来の伝統ある音楽や舞は各自月謝を払って師匠について習わなければならない。これはどう思うね」と。外国のすばらしい文明、文化を吸収して大きく前進していくことは大切なことである。しかし、そのために自国の伝統ある素晴らしい文化を忘れ、枯化させてしまつてはたいへんです」と。

日本で雅楽を学び、ハワイに帰つてからは学内での演奏のみでなく、ハワイでのいろいろな催しでも雅楽の演奏を披露し、1997年には、ワシントン、スミソニアンでのフェスティバルに招待され演奏しています。そして生徒の笛を作るために、ハワイの山に入り



1971年8月  
マスコミの取材を受けるハワイの方々



1995年 ハワイ大学パウハナ・コンサートの時に



1995年 切り出した竹で  
龍笛、高麗笛を作る社本氏



1995年 ハワイで笛を作る  
竹を切り出す社本氏



1997年 ワシントン、スミソニアンでのフェスティバルに招待されての演奏



2000年7月 ケルン大学にて 社本氏  
手作りの装束を着て ギュンター氏(左)



2000年 ケルン大学で筆樂を吹いて合奏を指導する社本氏(太鼓左)

竹を切り出して、製作するなどハワイならではの苦心も続く。

社本氏 ドイツ・ケルン大学へ

雅楽を教える

1998年、ドイツのケルン国立大学民族音楽部長ロバート・ギュンター教授が、客員教授として1年間ハワイ大学で教鞭をとりました。ギュンター氏は、雅楽に興味を持ち、同時に社本氏の指導力に目を見張り、自らも雅楽を学び始めました。ギュンター氏は、雅楽の魅力に取りつかれ、ドイツに帰国した翌年の2000年1月、社本氏に「ケルン大学

に雅楽部を作りたいので、ケルンに来て指導してほしい」と依頼しました。

社本氏はそのいきさつについて「私は、その依頼に対して「NO」と返答した。然し、その理由が「ドイツ語を全く知らないから」と分かると「ケルン大学の学生は99%英語が出来る」との事。再考して又々「NO」と答えた。その理由は「私がハワイに来た時代(1959年)ならば致し方ないが、今は日本にもつと若くてもつと雅楽を修めた先生が沢山います」と。この返答に「そんなことは知っている。でも、なんにも無い外国でがんばって、今日のハワイ雅楽会を作った君の経験がほしいのだ」と。「それならば石段の一段目を積みに行きましょう」と承諾しました。

2000年4月から7月までの3か月間、宮内庁楽部楽長東儀勝先生の推薦も受けて社本氏のケルン大学での雅楽の指導が始まりました。

社本氏は「楽太鼓、鉦鼓、鞆鼓、楽琵琶、笙、箏、龍笛：本当になにも無い！ あるのは生田流の箏三面。その箏に楽争の絃を張るのに道具は何も無い中、悪戦苦闘。太鼓に楽太鼓の絵をつけたり、地元でカーテンの生地を調達し、十二着を自分で縫い上げてしまったら、連日文字通りの悪戦苦闘でした。」と語る。

ケルン大学雅楽部結成へ

そしていよいよ、教え始めて3か月後の7月、ケルン大学のドイツ人学生らで作られた



2006年9月 ハワイ大学雅楽部、ケルン大学雅楽部、日本雅楽会による合同演奏。ハワイ大学で

ヨーロッパで最初の雅楽団の演奏会を開催。当日は、東洋の文化・芸術に造詣の深い要人が招かれました。社本氏は「どうなるかと心配でしたが、演奏終了後拍手が鳴りやまなかつた。そして、その打ち上げの席でケルン大学雅楽部が誕生したのです。」

2年後、2002年9月、社本氏はケルンに赴き、3週間の特訓を経て、楽琵琶も笙も高麗笛も揃え、ケルン大学大講堂でケルン大学雅楽部第3回発表会（2002年9月28日）を開催。この時の曲目は陪臚、舞楽・落躑躅として最後は、越天楽残楽三返。

その社本氏は、ハワイ大学での雅楽の指導はもとより、ケルン大学での雅楽の指導も認められて2009年4月29日、旭日双光章を叙勲されました。叙勲をお祝いして安齋省吾元宮内庁楽部首席楽長、押田良信前日本雅楽会会長の祝辞などを掲載した冊子が発行されました。そこには、社本氏の50年以上に渡るハワイ・ドイツでの雅楽の指導の歴史が記されています。

2年後の2004年6月26日、ケルン雅楽会5周年とギンクンター博士75歳を祝す演奏会には、日本雅楽会のメンバー17名を迎えての合同演奏会が開催され、社本氏は「この公演は素晴らしいものでした。私は感激で涙が出ました。」

さらに2年後、2006年9月には、社本氏が共に誕生させ育てたハワイ雅楽研究会とケルン大学雅楽部との合同演奏会がハワイと奈良で実現。（「雅楽だより」第7号2006年10月掲載）

多くの雅楽会が ハワイで演奏

ハワイでは、多くの雅楽会が演奏会などを開催しています。そのほとんどの雅楽会が、社本氏にお世話になってきたと語ります。

ある雅楽会の会長は「ハワイの社本氏に電話して「太鼓などをお借りできないでしょうか」と。すると社本氏はなんのためらいもなく「はい、どうぞお使いください」と返事をし、さらに演奏会場の準備や観光の案内まで世話してもらいました」と。

旭日双光章 叙勲 2009年4月

外務大臣より表彰 2004年3月



2015年11月18日 12月の学期末コンサートに向けての練習。社本氏の作舞による「今様」。舞人4人

叙勲の5年前には外務大臣より日米友好親善に寄与したとして表彰されています。

現在もハワイ大学で 週2回の指導

ハワイ大学での雅楽の指導は、水曜日はハワイ大学雅楽クラス、日曜日は卒業生なども含めたハワイ雅楽研究会と週2回の指導を現在も続けられています。



旭日双光章叙勲  
2009年5月13日 皇居



2015年11月17日夜、ハワイ雅楽研究会の練習。練習を終えると社本氏手作りの食事を囲む

訪ねた時は、12月最初の日曜日に開催される「学期末コンサート」に向けての練習の真最中でした。この学期末コンサートは、ハワイ大学東洋音楽科のコリアン、琉球、チャイニーズ、ハワイアン、箏曲などと一緒にハワイ大学内で奏されます。雅楽クラスの演目は平調 越天楽と社本氏の創作舞「今様」が舞人4人で演じられるという。

ハワイでは社本さん始め、皆さんにとってもお世話になりました。ありがとうございます。社本さんは現役で今も雅楽の指導と演奏を続けられています。今年で81歳。益々お元気で活躍されますようお願い申し上げます。

(鈴木治夫)

# 漢字遊びの楽しみ

宮田まゆみ

(新潮文庫『白川静さんに学ぶ 漢字は怖い』小山鉄郎著の「解説」(宮田まゆみ著)を一部変更して掲載します)

私は今、音楽大学で雅楽を中心とした日本の音楽の歴史の講義を担当していますが、漢字の意味を知るときの感動を学生たちと分かち合うのがこの上ない喜びです。毎年学生には参考図書を紹介しますが、何も知識がない最初の授業で、いきなり白川先生のご著書を読むのは学生には入りにくいかな、と思ったとき、小山さんの『漢字は楽しい』『漢字は怖い』はまさにうってつけの入門書となりました。小山さんは、白川先生の簡潔な、格調高い記述を、現代の普通の人のだれでもがわかるやさしい文章に置き換えて伝えてくれます。先生への限りない敬愛にあふれた文章は、先生ご自身も大切にされていた「子どもたちに伝えること」が、愛情に満ちた語り口で綴られていて、多くの子どもたちの眼も輝かせたに違いありません。最初、イラストがあるとイメージが固定されてしまつて危険では、とも思いましたが、はまむらゆうさんの明るく透き通った、ユーモラスな絵も、学生達の理解の大きな助けとなりました。

漢字のなりたちを知るとき、それが遠い三千年以上昔の中国のできごとにもかかわら

ず、「あ、そういえば私たちもこんなことをしている」と思うことがあります。そんなとき、漢字の生まれてくる瞬間の物語の名残が現代の日本でも生き続けていることがわかつてとてもわくわくします。文字の生まれる原動力となった水脈が私たちのなかにも流れているのですね。

たとえば「祭」という字は『漢字は楽しい』には次のようにあります。(『漢字は楽しい』文庫版P41〜42参照)

この字は古代文字を見ても、現在の字形を見ても、よくわかる漢字です。

この「祭」という字は「月」と「又」と「示」できています。その「月」は夜空の月ではなくて「にくつき」のほうの「月」で、一枚の肉切れのことです。「月」の横の二本線は肉の筋をあらわしています。「又」は手の形です。そして「示」は神を祭るときにテーブルです。つまり「祭」という字は、神を祭る祭卓に手で肉をのせて、お祭りをするという意味の漢字なのです。

「神を祭る祭卓に手で肉をのせて」というのも最初はびんとこないかもしれません。たとえば現代では仏教の法要に接する機会はずいぶん減っているのではないかと思います。仏教

では殺生が禁じられていますから、お供え物としてはお花やくだもの、お菓子などが多いのではないのでしょうか。一方神道では農作物に加えて魚や鳥獣が、神饌として捧げられています。そう、「肉」が祭壇にのせられるのです。

以前、昭和天皇の御大葬(大喪の礼)の横様がテレビジョンで放映されたときに、「奠饌幣」として大量の反物、塩水、農作物、菓子、海藻とやらんで、立派な鯛、雉、鶉などが白木の台にのせられて次々と運ばれていくのを見て、神道と仏教の儀式の違いをあらためて感慨をもつてながめたことを思い出しました。

『漢字は楽しい』には「祭」の次に、神と人が出会う所として「際」が挙げられていますが、さらに白川先生の字統を見ると「祭」という字が出ています。「祭」に「示」と「月」は神や祖先を祭る宗廟の屋根の形で、「廟中に祭つて神意をうかがうを祭」と続きます。うーむ、なるほど。祭するということとはそういうことだったのか、と感心することしきりです。

『漢字は怖い』の「はじめに」に小山鉄郎さんがこう書いています。

一つの文字を構成する意味が理解できると、関係した文字がいっぺんにわかるといふのが、白川静さんの文字学の特徴です。漢字は単なる記号ではなく、一つ一つの文字がそれぞれに意味を持ち、その全体が物

語のように体系的なつながりを持っていることは、多くの人にとって驚きだったらしく、「目から鱗が次々に落ちた」という感想をいくつもいただきました。

「祭」のなりたちがわかると、「際」の意味も、つながりをもつてわかってくるのですね。白川文字学はほんとうに面白くて、知るところが楽しくて、ぜひこの驚きと喜びを大勢の人と分かち合いたくなります。

さて「祭」もそうですが、学生たちと楽しんでる漢字をもっと紹介させてください。音楽大学なので音楽に関する文字が自然に多くなりますが、古代は音楽と宗教、そして「まつりごと」としての政治は切り離せないものでしたし、音楽、芸術、宗教、古代の科学など人間の精神生活は、近代のように個々の存在に分けられていなかったのです。一見音楽に関係なさそうな漢字も登場します。

まずは、白川文字学の中で最も重要な文字のひとつ、「𠂔」がふくまれた「言」。それから「音楽」、「楽」、「癩」、「醫」、「酒」、「歌」、「聲」、「聖」、「闇」、「由」、「𠂔」、「笛」……連想のように延々とつながっていきます。

小山さんもしばしば強調なさるように「漢字」という文字は、その成り立ちをちゃんと学べば、実は、みなそれらが互いにつながっていることがはつきりわかります。(『漢字は楽しい』文庫版P10)「また、その漢字のつながりを通して、古代中国の人たちが、自分たち



が生きている社会や自然、宇宙をどのように考え、捉えていたのかということを明らかにしたのが白川静さんの漢字学です(『漢字は怖い』はじめに)ので、漢字のつながりを連想も交えてたどっていくうちに、次々と関連性のある文字に関心が移ってとまらなくなってしまう。インターネットが発達して様々な情報が提供され、それを次から次へと眺めていくことを「ネット・サーフィン」と称するようですが、この「甲骨金文サーフィン」も、はじめるとなかなか止まりません。

それでは「言」から。(『漢字は楽しい・以下(楽)』p75、『漢字は怖い・以下(怖)』p236)

「言」は神に誓う言葉のことで、神へののりとおさめた器「言」を前にして、私のその言葉がもしつわりならば入れ墨の刑を受けます、と誓うそうです。「入れ墨の刑」？現代の私たちにはあまりなじみがありませんが、中国では古代から五刑のひとつとされ、また日本でも書紀にその記述があります。江戸時代には窃盗罪に対してそれが行われていたようです。明治五年に入れ墨刑が廃止され同年に裝飾用途の刺青も禁止(昭和二十三年まで)されたとのこと。意外に身近な時代まで、入れ墨の刑があったのですね。

「音」(白川静『漢字百話』p33(37参照))

「音」が、「言」の、神へののりとおさめた「言」の中に、神からの応えが返ってきたもの、と知ったときにはとびきり感動しまし

た。この「言」の中に一本棒が入ります。「言」それが、神からの応えが「音なひ」「訪れ」として返ってきたしるしです。

それ以来「音」という字を何度見ても、はじめて意味を知ったときのようじきどきします。学生たちもどきどきしてくれ、とても嬉しくなります。

「樂」

これは古代のシャーマンが持つ手鈴の形。字統には「その楽音をもって神を樂しませるのに使用した。」とあります。

「音楽」ってそうだったんだ、と感慨深く思います。今でも神社の巫女さんや神職さんが鈴を振り鳴らすのが見られます。

「療」||「瘳」

「瘳」は字統によると「療」という字の古い治療法を示す字で、古くシャーマンが巫医であった時代に、鈴を振って病魔を祓って病気を治したとのこと。 「樂」が医療行為でもあったのですね。

「醫」(怖) p268

その巫医がほかにもどのようなことをしたか、という、悪霊を祓う力をもった呪具としての矢を秘所におき殴つ形、そのときに清めの酒も用いたの、ちに「醫」の字が作られたといえます。

「酒」(怖) p260

少し時代が下って、唐代の中国から日本に

渡来した雅楽の曲名には「酒」に関するものがあります。当時の西域の胡の文化への憧れや、唐の宮廷の宴飲の様を彷彿させます。古事記に描かれる神功皇后と、建内宿禰の「酒楽の歌」、豊明(豊樂)の場面も、日本の宮中の宴飲の様がよくわかります。

「歌」(楽) p159

この字の基本形は「可」「言」と「丁」を組みあわせた文字で、のりとおさめた器に木の枝を振りかざして、祈りがかなうように神に迫るのだそうです。日本の宮中の御神楽に舞人が聖なる庭燎に櫛を振りかざす場面があり、思わず、いつか見た光景、と思ってしまう。その「可」を二つも重ねて、口を大きく開いて叫ぶ。「歌」の起源はこんなにも真摯で力強いものだったのです。音楽科の学生は特に感動します。しかしいったいどんなお願いだったのでしょうか。

「聲」

うたごえ、などと言いますが、「聲」は人間の声ではなく、古代の石の楽器「磬」を打つ音だそうです。アンバランスなへの字の面白い形をしていて、殷の前、夏の時代からあったといわれます。「耳」が強調されていますが、字統によりますと「神を招き、神の声を聞くことを原義とするものであろう」とのこと。この「聲」は今でも仏事法要の読経の節目節目に打ち鳴らされます。

「聖」

「耳」がありますが、これも「言」を高く捧げて、神さまの声を聞いているのですね。

「聞」

「門」の中に「音」が入っています。もうどきどきしてきましたね。字統では「音とはもと目にみえないもの、視覚ではとらえがたく、かすかに聴くことのできるものをいう。」「聞はもと、廟門で行われる儀礼に関する字であろうと思われる…もとは神のあらわれる闇という語であった」とあります。

古事記の中の印象的な場面が思い起こされます。神功皇后が神の託宣を仲哀天皇に伝え、神の声を聞くために、琴を弾くように勧めますが、天皇は信じずなかなか弾こうとしませんが、ようやく弾きはじめたと思つたらすぐに音が途絶え、灯りをともしてみるとすでに天皇の息は絶え…と、闇のなかで神の声を聞く儀式が行われたことがわかります。また、磬と同じように、琴も神の声を聞く重要な楽器だったことがわかります。

「由」「笛」「笙」(怖) p66, 69

小山さんが「笙の笛」をとりあげてくれました。「由」からのつながりです。「由」は「飄單」の類である「由」の実が熟して溶け、殻の中がからっぽになった形

「由」は「瓢形をした取っ手のついた酒器。もとは瓢を削りぬいて酒器に用いたの、う」

「笛」は「竹」でできた中空の「楽器」

さて笙という楽器は、殷の時代からすでにあったようです。中国ではこの笙は三皇のひとり、女媧という人類創造の女神が作った楽器と言われています。女媧は、これも三皇のひとりである伏羲と兄妹で、二人並んで腰から下は蛇の半身がらせん状にからみあった姿で描かれます。女媧と伏羲は苗族の神さまといわれますが、その神話の中で、人類滅亡の大洪水のときに二人で大きなひょうたんの中に逃げ込んで助かったと語られています。

その女媧が作ったという笙、息が入りやすい空気室（風箱）の部分は、笙が日本に渡来した八世紀頃には木製になっていて、また今でも笙をさかんに演奏する苗族のものも昔とは違って木製の風箱を使っていることが多いのですが、もとはひさごを割りぬいたものでした。

「ひさご」は「瓠」・「匏」・「瓢」など書きますが、私が使っている日本の伝統的な笙は、もとひょうたんを使っていた名残で、空気室の部分を含めて「匏」とよびます。古代中国の「八音」という楽器の材料による分類法でも、笙は「匏」に属します。

伏羲の名前も、「包犧」・「庖犧」などいろいろに書くこともありますから、「匏」と関係がある、ということでしょうか。

白川静先生は古代の聖職者の再来ではないか。そうとしか思えないときがたびたびあります。殷の湯王をたすけ導いたといわれる古代の神官「伊尹」のような聖職者。

伊尹の時代にはまだ文字の体系はととのつ

ていなかっただようではありませんが、それはともかく、伊尹はその字が示すように、神が宿る聖なる杖を持つていたそうです。

白川先生がひとたび漢字のなりたちを語りはじめると、まるで魔法の杖がひと振りされたように、私たちは三千数百年前の古代人の世界にいざなわれます。

ひとつの漢字が、もとは何を表す形だったか、何の形が集まってひとつの文字になったか、それを知るだけでも充分面白いのですが先生は、古代の人たちが何を考え、どういう気持ちで、どんな行動をしたか、その行動がひとつの文字の上にもどのように表されているか、それを克明に解き明かしてくれました。

どうりで甲骨文字や金文は生き生きと動いて見えるはずですが、そこに古代人の物語が集約されているのですから。

白川先生のお話しは、単なる漢字の字形の説明をはるかに超えて、文字に内包され、文字に象徴されている人間のいとなみを網羅しています。力強い光と優しさにあふれたまなざしで語られる古代人の物語は、古代ギリシヤの語り部、ホメロスやヘシオドスもこうであったかと思わせる躍動感と臨場感に満ちていて、私たちもすぐ眼の前でその光景を見ているような感覚に引き込まれます。

「え、なぜこんなことがわかるの？」と、実際にその光景を見てきた人でなければ分かりえないようなお話しをうかがって私たちはびっくりしますが、それは多岐にわたる学問と深い思索に裏打ちされ、そのうえ長い長い

長い歲月、甲骨文字を味わいつくした先生にとつて、ごく自然な流れだったことでしょう。それに、古代ギリシヤの叙事詩人たちに女神ミューズの靈感が降りてきたように、白川先生にも古代中国の神さまの靈感が降りてきたのかもしれないね。

## 席田物語

元宮内庁楽部首席楽長 豊 英秋

元慶二年（877年）清和天皇の大喪もあけ、いよいよ陽成天皇の大嘗祭。悠紀（東）は席田郷が選ばれ、歌舞の作成の為、多自然磨様がこの地につかわされ、私（豊原直連）は補佐のお役目。歌詞は己にできている。

：やがて伊津貫川（糸貫）、その風景は鶴が舞立ち、子等ははしやぎ、歌い、草や木も色あざやかに生々としている。「あの御方がお詠みになったのはここだな」。「エエ」むしろ田のや、むしろたの、いつぬき川にや、すむつるの、いつぬき川にや、すむつるの。（一段）。

すむつるのや、すむつるの、ちとせをかねてぞ、あそびあへる、よろづ代かねてぞ、あそびあへる（二段）。

「直連、筆を」、自然磨様が子等の歌を譜にされている。一時、筆を休め、「ちとせをかね

漢字遊びの楽しみは尽きません。読者のみなさまもぜひ、小山鉄郎さんの『漢字は楽しい』『漢字は怖い』、そして真打、白川静先生の膨大な著書の数々で思う存分楽しんでください。（平成二十三年 十二月、笙奏者）

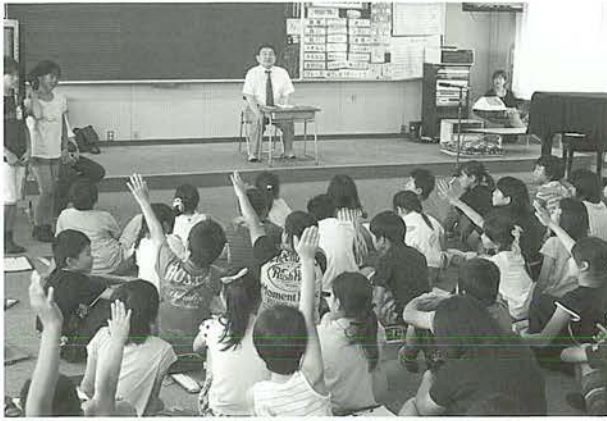
でぞ：か、この時（千年後）はどの様な世の中なのか」と、つぶやかれた…。

その後「席田」は都で催馬楽となり、明治にはいると宮内省楽部の「明治撰定譜」に組み入れられ、楽師によって歌いつがれて現在に至る…。そして今。

千年の時、発祥の地、岐阜県本巣市、席田小学校の生徒達の声で歌われる「席田」。時代を越えて席田郷の心呼び覚ます。これか



席田を歌われる 豊英秋先生  
写真・吉澤忍



席田小学校の生徒達 写真・吉澤忍

らはきつとこの子等によって、この地に歌いつがれる事であろう。はるか昔、無邪気に遊び、歌う子等の子孫なのだから。思へば、自分は「席田」の指導に、いや教え返しに、これも違う。そう、子等の心の中に潜む「席田」を目覚めさせ、この歌に導びかれる様にやってくるのだと気が付かされる…。やがて、歌のしめくり、「よろづよかねてぞ、あそびあへる」。生徒達、ものの見事に歌いきりました。「よろづよ、かねてぞ…か、この時（二万年後）はどんな世の中なのか…」

そしてその時、「皆さん、この歌は我々の故郷、あの青い星に生まれました。」

この赤い星では、数少ない平和を想う歌として、誰一人知らぬ者はいない。

後記

これは私の心の中の事であり「席田物語」として話が大きくふくらませている。唯、まぎれもなく「多自然磨」「豊原直連」は元慶の時代を生きてきた者たちである。多自然磨は、神楽歌の制定と云う大事業を成しとげ、歌の礎を築いた大家。豊原直連の功績は見当たらず、父、公連がいた「豊原」の名を継ぎ、楽家の二代目として次につなげた。

現在は「豊」となり四十五代つづいている。最後に、この小学校に「席田」の名がついた事に感謝したい。もしこの名がなければ「席田」はこの地に戻る事はなかったかもしれない。そしてこの機会に巡り合わせた生徒達には、魁となって「席田」を歌いつなげてほしい。

韓国交正常化50年

韓国で日本の雅楽行事を開催

洗足学園音楽大学講師

山本華子

日韓国交正常化50周年の記念行事として、韓国国立国楽院で雅楽器の展示会と雅楽公演を行った。コーディネーターとして本行事に関わってきた立場から、概要を報告する。

ソウルの国楽博物館で開かれた展示会（11月17日～27日）は日韓の雅楽に焦点をあてたもので、両者を比較する形で構成されている。

展示タイトルは「雅楽、韓日魂の響き」であり、3つのテーマを持つ。第1テーマ「韓国の雅楽」は韓国の文廟祭礼楽を中心とした雅楽器、衣装、古楽譜などを、第2テーマ「日



日韓の雅楽の楽器や装束が並べて展示「雅楽、韓日魂の響き」

本の雅楽」は日本の雅楽団体、個人から借りた雅楽器、装束（抜頭）などを紹介するものであった。日韓の箏や装束が並べて展示されていたため、比べながら鑑賞でき興味深い。また、第3テーマ「雅楽を通して見た韓日交流」では、両国のこれまでの音楽交流史、日本に伝わる韓国由来の音楽と楽器、朝鮮通信使の音楽関連記録を、年表、写真、動画などを通して知ることができる。

11月17日には、韓国の音楽関係者たちが募り、日韓雅楽の演奏とともに華やかに幕が開かれた。駐韓日本国大使の祝辞も寄せられた。



ソウル国楽院で日本の雅楽を伶楽舎が演奏  
解説は李知宣 淑明女子大学教授

続く11月18日（ソウル国楽院）、19日（釜山国楽院）には、伶楽舎による雅楽公演が行われた。韓国側の要請により高麗楽を中心としながらも、管絃、舞楽、復元曲を含めた多様なプログラム編成で、日本音楽を専門とする李知宣教授（淑明女子大学校）の解説が添えられた。

街頭に飾られたポスター、主要な駅での動画発信などの宣伝効果もあり、ソウル公演は満席、観客も集中して鑑賞していた。韓国第2の都市、釜山でも幅広い客層が集い、反応も良かった。公演の様子は国楽放送でラジオ放送されたため、多くの韓国人が耳にすることができた。

韓国で日本の雅楽の演奏が行われる機会は少ない。まして、雅楽器と装束の展示は、筆者の知る限り皆無であったように思う。この記念すべき節目の年に、日本の雅楽をこのような形で紹介できたことは両国の文化交流において非常に有意義であるだろう。

公演後の交流会では、伶楽舎のメンバーから「高麗楽の故郷で公演できて嬉しかった」という感想が述べられた。韓国の運営側も、雅楽を通じたさらなる交流に期待を寄せているようであった。

最後に、本行事にご協力下さった日本の雅楽関係者の皆様に、この場をお借りして御礼を申し上げたい。

## 宗教と雅楽

### パリの川風の中で

洋遊会 上野慶夫

雅楽団体はたいがいそうだろうが、わが洋遊会も神社やお寺で雅楽奉仕の機会が多い。昨年10月、花の都パリで開催の仏教行事で雅楽を演奏するという面白い体験をした。

その仏教行事とは富山県伝統の「立山布橋灌頂会」。

かつて霊山、立山は女人禁制の山だった。しかし、女性が来世の往生を願う場合、「布橋」と呼ばれる断崖絶壁の橋を菅笠、白衣、目隠しの死装束で渡り切り、彼岸で灌頂を受ければ登山と同じ功德があるとされた。江戸時代には大奥の女性の間で信仰が厚く、そのご代参の渡橋も多かったとのことである。現在は

天台、真言の声明と雅楽が女人衆を先導し、華やかかつ荘厳な儀式となっている。これをパリはサン・マルタン運河の橋で実施したのだ。

しかし、その橋、立山の断崖の橋とは違いパリ庶民に大変身近な橋とのことだった。通称「アメリカ橋」と言う。十数年前に「アメリカ」と言うちょっと変わった女の子が主人公の映画に使われたのだ。更に古い映画では「北ホテル」というのにも出ている。これは戦前、マルセル・カルネ監督の白黒映画だ。本当は生活に密着したお馴染みの橋なのだが、今回の行事では大変幻想的に見えたそうだ。私は見られるほうだったからわからないが、雅楽が一役買ったとすれば嬉しい。渡橋したパリ



パリ、マルタン運河 通称アメリカ橋での灌頂会

ジェンヌは何れも日本の女性以上に敬虔な表情、終わった時には周囲の見物からもすごい拍手を受けた。

パリの見物人が感心したのは、声明、雅楽、白装束の女性がとけあって、強く「仏教」を感じさせたからだと思う。東京では雅楽を神社専用の音楽だと思っている人が多い。仏事で雅楽を演奏すると、「どうしてお寺で雅楽なんですか」と不思議がられるが、わが北陸では法要で雅楽が自然に使われており、信者もしみじみと聴き入っている。

考えてみれば、御神楽や催馬楽は別として雅楽の多くはシルクロード経由、仏教とともに伝わってきたのだから、仏教との付き合いは長いわけだ。「陪臚」とか「迦陵頻」とか



アメリカ橋の上で演奏する洋遊会のメンバー

いかにも仏教ネタだと思われる舞も多い。

今年は申年なので、舞人がお猿のような面をつける舞、「蘇莫者」が人気らしい。洋遊会も今年はこの舞に挑戦する。この舞も仏教と関係がないわけではない。と言うのは、お猿の面の舞人と一緒に大きな唐冠を被って登場し、舞台上で龍笛を吹く「太子」という役がある。古くからの言い伝えでは聖徳太子のことだ。聖徳太子といえは、仏教を研究し、日本に広めた方である。有名な十七条の憲法にも「和をもつて貴しと為す」の次には「篤く三宝を敬え。三宝は仏、法、僧なり」とある。法隆寺や四天王寺でこの「蘇莫者」が舞われるのはもつともな話と思う。

神道、仏教、キリスト教それぞれに豊富な



菅笠、白衣、目隠しの死装束で渡るパリの女性



いつきの宮観月会 2015年9月26日

文化遺産がある。特に時代が古いほど、宗教心と芸術は切り離せない。行事が無事終了の翌日、パリの大聖堂で見事なステンドグラスに圧倒されながらつくづくとそう考えた。

齋王と観る月

「いつきのみや観月会」

美鈴の会 千種清美

齋宮に平安の舞と調べを

管絃の音が響く中、十二単を召された齋王がススキを名月に捧げる――。

伊勢神宮にはかつて神に仕える皇女「齋王」が都から赴いた。古くは記紀神話に登場する豊鍬入姫命、倭姫命の御杖代にさかのぼり、



いつきの宮観月会

制度としては今から一三〇〇年前から始まり以来、約六六〇年にわたり、齋王は六〇人以上を数えた。その住まいと役所は伊勢市に隣接する明和町にあり、現在は国史跡「齋宮跡」に指定されている。

齋宮跡には、三重県立齋宮歴史博物館やいつきのみや歴史体験館に続き、平成二十七年九月には復元建物三棟が建築され、整備が進んでいる。

十五回を数えるいつきのみや観月会は、竜笛講座の講師、中口幸七先生の企画構成である。中口先生は伊勢神宮雅楽部の楽長を務めた経歴の持ち主で、「一人でも多くの方に雅楽



いつきの宮観月会 2015年9月26日

を知ってほしい」という信念のもと、竜笛の演奏に加えて、平安時代のはやり歌をイメージした今様舞を創作した。越天楽の曲に、竜笛講座生の詩人が作詞をし、講座生の有志女性たちに簡単な振り付けの舞を指導した。とくに初回は初心者に指導期間が半年という難しいものであったが、先生の熱意とお人柄で好評であった。この有志が中心となって祭祀舞グループ「美鈴の会」が、のちに竜笛講座生により「齋宮雅楽会」が結成されたのである。

名月を愛でる演出

いつきのみや観月会は、以前は旧暦の八月十五日の十五夜に行われていたが、今は十五

夜に近い土曜日に開催される。夕刻、観月の儀から始まる。すでに装束を着けた竜笛講座生をはじめ、美鈴の会、齋宮雅楽会のメンバーが揃い、管絃が奏でられ、その年に選ばれた齋王と侍女が登場し、秋の収穫物を供える。毎年、フォトコンテストが開催されるため、カメラマンも集まり、盛り上がる儀式だ。

そして、齋宮女御といわれた徽子女王と娘の規子内親王の和歌が披露される。齋宮女御の母子が合奏する琴音に合わせるように鳴く虫の音を聞いた和歌が独特の節回しで唱和される。

続いて、中口先生創作の「今様舞」、雅楽器の紹介、美鈴の会による平安の舞などが次々と行われ、齋宮が最も栄えた平安時代の観月会を思わせる雅やかさだ。近年には、体験館前の広場にロウソクを点灯させるライトアップや、露店も軒を連ねるようになり、当初は三〇〇人ほどであった観客も今では天候がよければ二五〇〇人ののぼり、町の一大イベントに発展するまでになっている。

「齋宮の観月会は、観客が齋王とともに月を愛でることを主としている点大きい」と中口先生。確かに私も観月会で舞わせてもらうと、名月を愛でた平安の人々の気持ちに寄り添えるように思う。復元されつつある齋宮跡で、仲秋の名月を齋王と観る。その時、私たちの舞と雅楽が名月と人々をつなぐものになれたらと願わずにはいられない

現代語訳『楽家録』(7)

監修 東京学芸大学教授 遠藤 徹  
十三 三管総論

第二十七 残楽の大意 (P473)

残楽は、御遊のときには必ず行われる。(およそただ「御遊」というのは「奏楽御遊」のことである。その他の御遊は「某御遊」という。「蹴鞠御遊」の如くがそれである) 絃類を愛するためにこのこと「残楽」がある。とりわけ箏を褒めるためである。故に琵琶・和琴だけで奏する例はない。箏は数絃でこれを弾くといつても、琵琶、和琴は各一絃を限りとする。又、三管に於いては箏を賞でる。故に他管はみな止めて、ただ箏のみが残つて演奏する。これは又箏の声「演奏」を助けるためでもある。およそこれ「残楽」を奏するに、三返、或いは五返で行う。奏楽に七曲あるときは、第三、第六の二曲に「残楽」が在る。五曲あるときは第三の一曲に限る。その方法は左に挙げる。(楽曲七曲あれば、第二、第四、第六、以上三曲。五曲あれば、第一、第四、以上の二曲。これは近年の例である。旧記は未だ考察していない)

残楽三返の法は、先ず頭取「音頭」の横笛が吹きはじめ、初太鼓より鳳笙の各々が付けそして箏、及び残りの笛「助管」が残らず付ける。(但し箏は頭取「音頭」の管のみ先に付け、後から助管が付ける。この方法は常の如くである「附け方は通常の順序である」) 三つの鼓「打ち物」を用いる次第も常の「通常の通りである」如くである。(いわゆる三鼓は、鞆鼓、太鼓、鉦鼓である) 次に琵琶、和琴が次第「順に」に付ける(その方法は「通常の通り」常の如くである) 楽曲を一反奏し

終わると、各管の助管と三鼓は皆、止める。(三鼓の拍子を加えるのは一反の末で、これも「通常の通り」常の如くである) 箏は皆、止めない。そして二返の頭より、鳳笙、箏、笛の各音頭の一管のみが残り、奏する。故に残楽の名がある。そして鳳笙は二返の半ばに至り、止める。横笛は、三返の頭の拍子の文四五六或いは七八九に至り止める。ただ箏はまた、或いは止め、或いは奏し「途中で吹き止め、あるいはまた吹き始めたりを繰り返す」

また、或いは止め、或いは奏し「途中で吹き止め、あるいはまた吹き始めたりを繰り返す」絃の聲「演奏に」に接する「添う」のみである。そして箏が始めにこれを止めるのは、横笛の後、拍子の文、六、七或いは九、十許りに至ったときである。そして拍子の文、六、七或いは九、十ほどを待つてまた奏する。ただ時宜「よいしおどき、ころあい、うかがいながら」に随つて奏するのが善い。預「前もつて」その法「決まった演奏法に決めるのは難しい」に一定の方法を定めるのは難しい。そして楽の終わりの前、拍子の文が三十四、五で箏が止まり、この後は再び奏さない。(管を箏に収めてもよい) 次に琵琶は拍子文十許りを弾く。そして止める。次和琴は拍子の文十あまりを掻いて止める。ただ箏のみは曲の終わりに至るまで弾く。そして上首「長老、主席奏者」より次第「順」に止句を弾く。(ここでは「夜半楽」でその節「きつかけ、節目、演奏順序」を論じた。他の曲は是に準じて分かるであろう)

五返の方法では、二返を奏し終わると助管と三鼓は皆止める。(鞆鼓、太鼓、鉦鼓は二返の頭より拍子を加える。「通常の通り」常の如く) 三返の終わりの前にいたり、鳳笙が止め四返の終わり、或いは五返の頭にいたり、横

笛が止める。その後、箏も止める。或いは止め、或いは奏する。その方法は、三返の時のようにする。絃の次第「順序」はまた、三返の時のようにする。そもそも残楽五返を奏するのは、専ら絃の声を愛で、久しく「長く」弾かせる為である。故に箏は楽曲の終わりを計り早く止め、管を箏に収めてもよい。そうでないといふと、本意「本来あるべき姿」にならなってしまう。「絃のみの演奏が少なくならなってしまう。それは本来の残楽の姿ではない」としたら、それは本来の残楽の姿ではない

第二十八 残楽の制法 方法 (P475)

残楽は三管ともみな重要であるので、故に疎業の者「良く知らない人・上手でない人」はこなすことが難しい「演奏に向かない、充分に演奏できない」。その方法は三管ともその当曲の聲音「曲の宮音」で吹きとめてはいけない。他律を以つて止めるべきである。(箏が弾き終わるとき、その当曲の宮音で止める。故に管の聲「管楽器」はこれを避ける。これは残楽が専ら箏を主とするゆえである) 例えば平調の曲では、林鐘、南呂を以つて止めるのを最善とする。(これは太簇より八律「五度」隔て、相生「和音」の律聲「音程」であるからである) 又、曰く「およそ残楽は専ら箏を主とし、そして箏を以つてこれに接する。「合わせる」故に箏は他管の聲を受けて「箏は、他管の演奏を聴きながらも、意識は箏の演奏に寄せて演奏する」専ら意識を「心を」箏に寄せて奏する。箏、笛はまた絃の聲を受けて意識を箏に寄せて奏するのがよい。箏、笛もまた絃の演奏を聴きながら、箏の音に合わせて演奏するのがよい」。皆が

このようにすれば声音に和さないことは無く楽曲が善くないことは無い。「みながこのように合わせながら演奏すれば曲がうまくいく」また曰く、三管が数人で奏している間は、一管「一人」でも吹きやめることの無いように。但し、箏は蘆舌がおかしいときは、この限りではない。「箏の蘆舌がおかしいときは、吹きやめて直してもよい。」

前号に掲載できなかった演奏会など

○豊英秋の領域(愛知)

12月11日(金) 午後6時半

名古屋能楽堂けい古室(地下)

朗詠新豊 蘭陵王笙独奏 安摩・二ノ舞

演奏 主韻会

客演 宮内庁式部職元首席楽長 豊英秋氏

冬く春までの主な雅楽演奏会など

NHK-FM 雅楽

1月1日(金) 午前8時~8時15分

太食調音取 合歓塩 長慶子

演奏 宮内庁式部職楽部

NHK Eテレ(教育テレビ) 舞楽

1月2日(土) 午前6時35分~55分

舞楽 蘇莫者

演奏 宮内庁式部職楽部

厳島神社 元始祭・地久祭 (広島)

1月1日(金) 午前5時 歳旦祭 振鉦

1月2日(土) 午後1時 二日祭

舞楽 萬歳楽 延喜楽

1月3日(日) 午後1時 元始祭

舞楽 太平楽 狛柁 胡徳楽 蘭陵王

納曾利

1月5日(火) 午前5時半より地久祭の祭典  
後 舞楽 甘州 林歌 抜頭 還城楽  
演奏 天王寺楽所雅亮会有志 厳島神社

新春雅楽演奏会 (大阪)

1月3日(日) 午後2時 無料  
八幡神社(大阪府泉佐野市南中安松)  
管絃 平調 越殿楽他  
舞楽 蘭陵王  
演奏 なんば雅楽会

上賀茂神社 新年竟宴祭 (京都)

1月5日(火) 午後4時30分より  
舞楽 散手 演奏 平安雅楽会

上賀茂神社 竟宴祭 (京都)

1月5日(火) 午後4時半  
舞楽 散手 演奏 平安雅楽会

今宮戎神社奉納舞楽 (大阪)

1月8日(金) 午後2時 今宮戎神社  
振鈴 承和楽 白浜 蘭陵王 長慶子  
演奏 天王寺楽所雅亮会有志

熱田神宮 踏歌神事 (愛知)

1月11日(月) 午前10時・午後1時  
卯杖舞 扇舞 竹川半首 萬春楽  
何ぞもそも

伊勢神宮 一月十一日 御饌 東遊 (三重)

1月11日(月) 午後1時ごろ  
内宮神楽殿東隣 演目 東遊

問合せ Tel 0596-24-1111

春日大社 舞楽始式 (奈良)

1月11日(月) 午後1時 林檎の庭  
管絃 双調音取 陵王  
舞楽 振鈴三節 延喜楽 蘇莫者 長慶子  
問合せ Tel 0742-22-7788

Kitaraniニューイヤークンサート  
〜雅楽(北海道)

1月13日(水) 午後7時  
札幌コンサートホールキタラ(小)  
3500円 小中高生500円  
管絃 平調音取 越天楽 盤渉調音取  
越天楽 千秋楽  
舞楽 抜頭(左方)  
芝祐祐復曲 大曲 団乱旋  
演奏 伶楽舎

問合せ Tel 011-520-1234

東京楽所 第8回雅楽定期公演 (東京)

新春の雅楽  
チケットプレゼント有り  
1月17日(日) 午後2時 東京オペラシティ  
S席5000円 A席4000円  
第一部 管絃 太食調音取 仙遊霞 還城楽  
第二部 舞楽 蘇莫者 白浜

問合せ Tel 03-3560-3010

中村かほる 楽琵琶

ソロコンサート(東京)  
1月23日(土) 午後2時 前売3000円  
当日 3500円  
リプロホール  
演目 楽琵琶秘曲と小品  
演奏 中村かほる(楽琵琶)

主催 リプロコーポレーション

問合せ Tel 03-3372-4531

雅楽の館新年の雅楽 (富山)

1月24日(日) 午後2時 無料  
高岡市雅楽の館  
管絃吹きと舞楽吹きで  
五常楽 陪臚 蘭陵王  
問合せ Tel 0766-64-0390

席田郡成立1300年記念事業 (岐阜)

催馬楽「席田」を謡う  
1月30日(土) 午後2時 千円  
本巢市民文化ホール  
管絃 双調調子 賀殿急 胡飲酒  
特別演奏 催馬楽席田大合唱  
舞楽 迦陵頻 八仙  
演奏 主韻会 客演

宮内庁式部職元首席楽長 豊英秋氏

宮内庁式部職元首席楽長 安齋省吾氏

問合せ Tel 058-323-7764

春日大社 節分 万灯笼 (奈良)

2月3日(水) 午後5時半ごろ  
舞楽 甘州 林檎の庭  
問合せ Tel 0742-22-7788

雅楽演奏会 (埼玉)

2月7日(日) 午後4時 1000円  
行田市教育文化センター くらいホール  
管絃 平調 越天楽 催馬楽 更衣 陪臚  
舞楽 振鈴一節 貴徳 陵王  
主催 忍雅楽会  
協力 雅楽道友会  
問合せ Tel 090-4830-1903

千歳トリオ

ドイツ・オランダツアー2016  
2月12日(金) トリアア(ドイツ)  
2月13日(土) トリアア(ドイツ)  
2月14日(日) ハーグ(オランダ)  
2月19日(金) ケルン(ドイツ)  
2月20日(土) アムステルダム(オランダ)  
2月21日(日) デュッセルドルフ(ドイツ)

演奏曲 春鶯囀遊声 入破 朗詠嘉辰  
三宅一徳作曲黎明、Antoine Beuger 作曲「日  
本三部作」など

3月12日(土) ブランデンブルク(ドイツ)

演奏曲 小坂咲子作曲「華蝶乱」(箏篋とオー  
ケストラのための)  
演奏 雅楽トリオ千歳  
主催 Opening 16音楽祭他

浪速の精華 (大阪)

四天王寺「聖霊会」の声明と舞楽  
2月19日(金) 午後6時半 4000円  
いずみホール  
第一部 舞楽四箇法要(四天王寺式衆との共  
演)行道一曲 蘇利古 唄 散華  
承和楽 梵音 錫杖 長慶子

第二部 入調舞楽 抜頭 陪臚

演奏 天王寺楽所雅亮会有志  
問合せ Tel 06-6641-0084

御正當会奉納舞楽 四天王寺太子殿 (大阪)

2月22日(月) 午前9時半  
舞楽 振鈴 承和楽 長慶子  
演奏 天王寺楽所雅亮会有志  
問合せ Tel 06-6641-0084

国立劇場 舞楽 (東京)

チケットプレゼント有り  
2月27日(土) 午後2時  
1等4600円 2等3700円  
国立劇場大劇場  
舞楽 振鈴一節 二節 長保楽 破 急  
大曲 春鶯囀 一具 遊声 序 颯踏 入破  
鳥声 急声

出演 宮内庁式部職楽部

問合せ Tel 03-3265-7411

関西雅楽公演vol.6「打球楽吉具」(兵庫)

チケットプレゼント有り  
2月28日(日) 午後2時 3000円  
兵庫県立芸術文化センター  
神戸女学院小ホール  
管絃 双調調子 颯踏 入破

問合せ Tel 078-3265-7411

チケットプレゼント有り

2月28日(日) 午後2時 3000円  
兵庫県立芸術文化センター  
神戸女学院小ホール  
管絃 双調調子 颯踏 入破

催馬楽 安名尊 一段 二段 三段  
 舞楽 打球楽 一帖 二帖 三帖 四帖  
 ゲスト 安齋省吾師  
 演奏 博雅会  
 問合せ Tel 080-2415-2347

天王寺楽所雅亮会 (大阪)

雅楽練習所発表会

3月10日(木) 午後6時 無料  
 大阪国際交流センター大ホール  
 初級2 陪臚 中級 三臺塩急 上級 白柱  
 別科 千秋楽  
 舞楽 振鉾 延喜楽 萬歳楽 長慶子  
 問合せ Tel 06-6641-0084

春日山春季彼岸会 (福岡)

3月20日(日) 時間など未定  
 春日山雅楽御堂 舞楽 曲目未定  
 演奏 筑紫楽所  
 問合せ Tel 092-596-8585

薬師寺 花会式 (奈良)

3月29日(火) 12時45分  
 舞楽 蘭陵王 迦陵頻  
 演奏 南都楽所

石清水八幡宮 男山桜祭 (京都)

4月3日(日) 午後2時  
 舞楽 陪臚 迦陵頻 胡蝶  
 演奏 平安雅楽会

博雅会雅楽東京公演 vol.4 (東京)

問合せ Tel 075-981-3001  
 チケットプレゼント有り  
 4月6日(水) 午後7時 3000円  
 渋谷区文化総合センター大和田伝承ホール

管絃 双調 廻盃楽 酒胡子残楽三返  
 歌謡 催馬楽 美濃山  
 舞楽 春庭花 落躑

演奏 博雅会  
 ゲスト 池邊五郎師  
 問合せ Tel 080-2415-2347  
 京都御所一般公開舞楽 (京都)

高岡市福岡町さくらまつり (富山)

4月10日(日) 12時 無料  
 高岡市福岡町さくら会館  
 舞楽 春庭花 蘭陵王ほか  
 問合せ Tel 0766-64-0390  
 賀茂曲水宴 上賀茂神社 (京都)

梅宮大社 桜祭(雅楽祭) (京都)

4月17日(日) 午前11時  
 奉納舞楽未定  
 演奏 平安雅楽会  
 問合せ Tel 075-781-0011

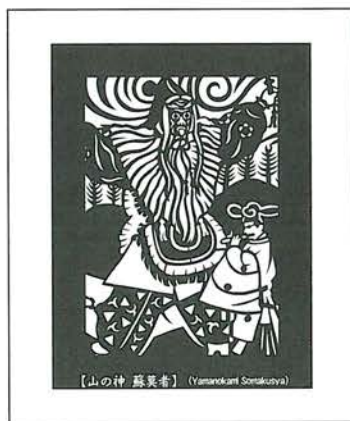
第12回 雅楽道友会「たけの音」 (東京)

4月19日(火)  
 大井町きゅりあん小ホール 演目など未定  
 問合せ Tel 03-3783-2371  
 総本山知恩院「御忌大会」声明付楽(京都)

カレンダー

○雅楽切り絵暦  
 ※定価2000円 問合せ注文は  
 Tel 022-275-7317又は  
 FAX 022-275-6449へ

○「宮中雅楽カレンダー」  
 発行 (有)麻布企画 1000円  
 取扱い 菊葉文化協会ほか  
 問合せ Tel 03-5222-3531



雅楽切り絵暦「蘇莫者」

芝祐靖先生へ質問を

芝先生へ笛に関する質問をメールかFaxでお寄せください。お待ちしております。

寄付のお願い

ご協力いただける方、寄付をお願い致します。お振込は、購読料の口座へ、通信欄に「寄付」とご記入ください。

「雅楽だより」

購読・継続 申し込み方法

購読料一年(4回発行)二千円。(送料込)

郵便振込用紙に住所、氏名をご記入のうえ、

「口座番号」00140-5-614032

「加入者名」雅楽協議会

までお振込みください。ご記入頂いた住所に

「雅楽だより」を送らせて頂きます。

あとがき

新年明けましておめでとうございます。「雅楽だより」も12年目を迎えます。本年もよろしくお願いたします。

「雅楽だより」第44号

2016(平成28)年1月1日

発行 雅楽協議会

編集 雅楽協議会「雅楽だより」編集担当

連絡先 Tel 188-0013

TEL: 042-4511-8898

FAX: 042-4511-8898

メール gagakudayori@yahoo.co.jp

http://www.gagaku-kyougikai.com/

印刷 秀英堂紙工印刷株式会社

(株) 武蔵野楽器

〒114-0003 東京都北区豊島1-5-6

電話 03-5902-7281

Fax 03-5902-7282